

# アリエル

第170号

二〇〇九年五月三日

発行人 井田 泉

〒六〇四―八四〇三 京都市中京区聚楽廻中町四五

<http://blog.livedoor.jp/izaya/>

「人はそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、脅かすものは何もない。」ミカ四・四

## そこでお目にかかれる

週の初めの日の朝ごく早く、二人のマリアとサロメがイエスの墓に行きました。イエスの体に油を塗ってきれいに葬り直すためです。気がかりは、墓の入り口をふさいでいる大きな石のことでした。ところが来てみると、どうしたことかその大きな石は脇へ転がされており、墓の中に入ると白い長い衣を着た若者がいてこう言いました。若者とは天使でしょうか。

「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたと

おり、そこでお目にかかれる』と。「マルコ一四・六―七

「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。……」

なぜ、特に「ペテロ」の名が挙げられたのでしょうか？ 弟子たちの中にペテロは含まれているはずなのに。その白い長い衣を着た若者は、イエスの思いを伝える代弁者なのででしょうか。とすればイエスは、特にペテロのことを心にかけておられるというのでしょうか。

夜が明けて次第にあたりは明るくなってきました。春の朝のすがすがしい空気。緑が目に見え、暖かな光と風……

しかしこの時、この瞬間、ペテロは、暗黒の中で息を詰めて、心も体もこわばっていました。自分だけはイエスさまについて

行くはずだった。ほかのだれが逃げようと裏切ろうと、自分だけはイエスと共に行くつもりでした。

「たとえみんながつまづいても、わたしはつまづきません。」

二、三日前に自分が言った言葉がよみがえってきます。

恐ろしい。イエスを捕らえて殺した人びとが自分を捕らえに来るかもしれない。身を隠しています。しかし恐ろしいのは外からの迫害だけではない。それよりもっと、自分自身が恐ろしい闇です。自分が苦しみます。イエスを見捨てた。誰よりも大切な人を裏切って死なせた。後悔と自責でペテロの心は破れています。生きていても死んだと同じ。自分は生きるに値しない人間です。

しかしイエスは、ペテロを忘れておられませんでした。

あの夜ガリラヤの湖の舟の中で、ペテロは他の弟子たちと共に、逆巻く波と風の中、恐怖におののいていました。イエスが近づいて行かれたとき、それをイエスと知った。ペテロが何と言ったかを、イエスは覚えておられます。

「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」（マタイ一四・二九）

イエスが「来なさい」と言われると、ペテロは舟から降りて水の上をイエスのところに来ようとしたのです。損得も危険も可能かどうか何も思わず、ただイエスのところに駆け寄りたかった。そのペテロを、イエスは覚えておられます。

しかしペテロ風を見て恐ろしくなり、おぼれかけた。

「主よ、助けてください！」

そのとき、ペテロがどんなに切にイエスを呼んでその手にすがったかを、イエスはご自分の手と体と心に覚えておられます。イエスは手を伸ばしてペテロを捕まえ、舟に乗り込ませられました。

ペテロがどんなにイエスを愛し、慕って

いたかを、イエスは知っておられました。裏切ったことの後悔。自分がイエスを死なせたという自責。彼の心は絶望と自責で破れています。今、ペテロはおぼれていきます。いちばん危ないのはペテロです。絶対にペテロを見捨てることはできない。あのとときつかんだペテロを離さない。イエスは決意しておられます。

「弟子たちとペテロに告げなさい。『あなた方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。』」

ペテロはイエスを失った。しかしイエスはペテロを失ってはおられない。ペテロの人生はここから始まるのです。

イエスはガリラヤに行かれます。ペテロを見捨てて行かれるのではありません。ペテロが必ず行くはずの場所に、ペテロより先に行かれる。先導されるのです。そして再びペテロはイエスを見る。イエスに会うのです。

今は暗黒しか見ない彼の目は、まもなく必ずイエスを見るのです。

わたしたちはペテロです。行き詰まり、絶望し、負い目を持ち、自分を責め、闇を知っているなら、わたしたちもペテロです。しかしイエスさまはわたしたちを見捨てられない。あなたの道をわたしが先に行くとあなたに必ずわたしが行く道を歩む。そしてあなたは必ずわたしと会う。

イエスは墓にはおられない。しかし墓を包む朝の光と春の風は、闇の中のペテロを包んでいます。復活されたイエスさまと共に、わたしたちの新しい人生の道が始まります。

（二〇〇九・四・一二 京都聖三一教会）

## 山のいただきで

今日は大斎前主日。十字架に死んで復活されたイエスさまに、四〇日後に新しく出会うことを願い、それを目標とし、それに備えて、希望をもって進みたいと思います。わたしたちはこの一年、またこの大斎節を「祈りを学び、深める」ことを共通の

目標としました。ところで、わたしたちが祈る前にイエスさまご自身が祈っておられました。

「六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」マルコ九・二―三

イエスさまの姿が三人の弟子たちの前で変わった。イエスの変容は祈っておられる中で起こったのです。今日読んだのはマルコ福音書ですが、ルカ福音書ではそれがはつきりと記されています。

「この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」ルカ九・二八―二九

この箇所を読むと思ひ出すことがあります。今から二四年前の一九八五年三月一七日の主日、韓国聖公会のソウル大聖堂で聞いた説教です。

その前の年、一九八四年から日韓の聖公会の交流が正式に始まり、両方の聖公会に日韓・韓日協働委員が立てられました。わたしは日本側協働委員のひとりとして、その年一九八五年秋に開かれる第二回日韓聖公会宣教セミナーの準備のためにソウルを訪問していたのです。三五歳でした。ソウル大聖堂の主任司祭は、朴鍾基パクジョンギ神父。朴鍾基神父は韓国側協働委員のひとりでした。

それで日曜日に、日本からの韓国を訪問した三名は、朴鍾基神父の司式されるソウル大聖堂の聖餐式に参加したのです。

五〇〇人くらい集まった、けれども静かに落ちていて進んでいく歌ミサでした。そのときの説教がちょうどルカ福音書による主イエスの変容の箇所でした。

わたしは韓国語を読むのはある程度できるのですが、聞くのは苦手です。ところがその日の朴鍾基神父の説教は鮮明にわたしの耳と心に入ってきました。

その要旨はこんな内容でした――イエスが祈っておられるうちにその姿が変わった。この出来事から学ぶことがある。

第一に、祈りは生活を変える。もしわた

したちの信仰と生活が少しも変わらなくて力がないとすれば、それは祈りがないからだ。祈ることがわたしたちの姿を変え、信仰と生活を変える。

第二に、祈りは神秘的体験を与える。神秘的体験といっても特別なことである必要はない。イエスさまに近づきたい、イエスさまの思いとひとつになりたい、という願いをわたしたちが持つようになるなら、それも重要な神秘的体験である。ミサにあずかることも神秘的体験である。ミサにおいて、わたしたちはイエスさまとひとつになれるのだから。

第三に、神秘的体験を与えられたわたしたち、ミサにあずかったわたしたちはそのままそこにとどまるのではない。イエスが変容という神秘的体験をされた山から下って行かれたように、わたしたちもまたここからこの世に出て行く。信仰は自分の中に、自分の満足の中にとどまるのではない。神さまのために、隣人のために、ここから派遣されて出て行く。

その年の秋の日韓セミナーは大阪で開かれ、意味深い集まりとなったのですが、そ

れには朴鍾基神父の率直な姿勢と発言が大きく働いていたことを記憶しています。

ところでその翌年の一九八七年七月、韓国の民主化運動は大きな高まりを見せ、ソウル大聖堂はそのシンボルのひとつとなりました。というのは、政府の弾圧のため集会をする場所が見つからなかったとき、ソウル大聖堂がその場所を提供したからです。集会を阻止しようとする機動隊（戦闘警察）がソウル大聖堂を三重に取り囲み、人々の出入りを遮断しました。こうしたなか、機動隊がソウル大聖堂に突入し、構内の主教館の窓と玄関を壊し、朴鍾基司祭を殴打してけがをさせるといふ事態となりました。

この後、大韓聖公会のほとんどの聖職がソウル大聖堂に一週間籠もって断食して祈祷会を継続しました。聖堂という聖域（聖なる神の領域）を侵犯した警察権力を糾弾すると同時に、そのような不義なる社会のありかたを黙認してきた自分たちのあり方を神の前に懺悔するという趣旨でした。

朴鍾基神父はただ聖公会の内部だけでは

なく、韓国基督教教会協議会（NCC）の人権委員長として、身の危険を顧みずに大切な働きを続けられました。あるとき、在日韓国人の牧師がソウルのホテルに滞在していました。警察がその留守中にそのホテルの個室を無断で搜索しました。朴鍾基神父はNCC人権委員長として警察に抗議し、それが無視されたので警察署長を検察庁に告発する、ということまでなさいました。神が貴い者とされた人が、地上の力によつて不当にあなどられ、踏みつけられるのを許すことができなかつたのです。

朴鍾基神父は、わたしがあの説教を聞いて七年後の一九九二年に五七歳で逝去されました。朴鍾基神父の追悼文集が二〇〇二年に出され、それを友人からもらったのですが、その本の題名は『麦の種の信仰者 朴鍾基』。表紙に写真があります。他の人たちが向こうを向いて進んで行くのに、朴鍾基神父はひとりこちらを向いて立ち止まっています。わたしはここに現代の預言者の姿を見るのです。

今日の福音書に戻ります。山の上で三人

の弟子たちはイエスの姿が変わるのを見ました。信仰はイエスの姿を見つめることです。弟子たちがおびえ、あるいは感動するとき、イエスご自身が弟子たちを見つめておられます。

変容されるイエスの姿がわたしたちの心に宿り、イエスの愛のまなざしがわたしたちの魂に入るなら、わたしたちにも変容が起こる。祈られるイエスに支えられてわたしたちも祈るなら、主イエスの愛の輝きはわたしたちのうちに輝くようになるのです。

祈りましょう。

主イエスよ、山のいただきで現されたあなたの姿を仰がせてください。あなたのみ姿の光をわたしたちも宿す者とならせてください。あなたを信じ、あなたに従わせてください。アーメン

（二〇〇九・二・二二 京都聖三一教会）

○京都聖三一教会に移って四年目、三年四ヵ月ぶりに「アリエル」を二号分出すことになりました。復活の主の祝福が皆さまにありますように。